令和４年度学校経営計画　学校評価書

岡山県立岡山城東高等学校

学校経営計画 重点的取組　および　取組の柱	分掌名	具体的な方策	目標とする状態・達成基準	達成状況（中間）	中間評価	達成状況（最終）	最終評価	結果分析及び改善策
重点的取組(1) 組織的な授業研究に取り組み、創造的・批判的思考力を持つ生徒を育成する。	教務課	カリキュラム･マネジメントの円滑な運営に向けて、全体像を整備し、周知を図る。	カリキュラム･マネジメントの全体構造を整え、手引き書やポートフォリオが実際に運用されている。	「カリキュラム・マネジメント全体構想」を作成し、それに基づいてシラバスの作成や授業参観シートの整備等を行った。	B	「10 の資質・能力」の自己評価アンケートや授業アンケートの結果を通して現状の把握に向けた取り組みを進めるとともに、観点別学習状況の評価の実施に向けた仕組みの構築を進めた。	B	さまざまな取組が単発のものにならないよう、アンケートを通して分かった具体的な課題を解決する視点で授業改善を行ったり、シラバスやポートフォリオをもとに自己調整を図る生徒を育成したりすることが求められる。
	GLOBAL	「総合的な探究の時間・学校設定科目」地域密着の課題研究の取組において、創造的・批判的思考力の育成を図る。	GPS-Academic における各項目において、上位評価者の割合が 40%を超える。	GLOBAL Ⅰ では、予定どおり、スキル学習、講演会、企業訪問等を実施し、各取組の振り返りに基づいて継続した指導を行っている。 GLOBAL Ⅱ・Ⅲでは、学類の専門性を生かした課題研究が実施できている。中間発表では、岡山大学の教員の指導助言を受け、内容の充実を図っている。	B	課題研究、講演会、企業訪問等を通して、創造的・批判的思考力の育成も踏まえ、取り組むことができた。課題研究発表会の論文からも、創造的・批判的思考力の成長が見られる。 GPS-Academic の結果は未着だが、学校自己評価アンケートでは該当 7 項目中 4 項目の平均値が上昇（残り 3 項目も下がらず）しており、成果が出ている。	B	スキル学習、SDGs 講演会、企業訪問、課題研究講演会、課題研究の一連の流れを踏襲・整理・精査し、生徒によい学びを提供できた。 学類の特色を生かした研究テーマの設定については、生徒の主体的な学びを引き出した一方で、地域密着を前提とした課題設定の難しさを感じるケースもあり、課題設定の枠のとらえ方を広げていくことも検討する。
	JLP	教務課とともに、授業参観や研修会等を企画し、学習評価や定期考査の問題作成に関する研究をする	研修会を教科ごとに、または、全体で実施し、学習評価方法や問題作成方法を共有できる	教務課とともに、OJT 研修会として評価について各教科で学習評価の研修会を行い共有できた。しかし問題作成方法の共有は２学期以降となる。	B	各教科において授業参観も積極的に行い OJT 研修も充実していた。定期考査問題を教務課へ提出している。若手のいる教科では問題作成について話し合いが行われている。	B	授業改善や評価方法について各教科で情報共有が行われている。次年度は、試験問題の作成についても各教科で共通理解がはかれるよう機会を設定したい。
重点的取組(2) 高度な英語運用能力とグローバルな視野を持つ生徒を育成する。	GLOBAL	「総合的な探究の時間・学校設定科目」における取組において、グローバルな視野を持つ生徒の育成を図る。	学校自己評価アンケートの項目「城東高校は、授業や学校行事、講演会などを通してグローバルな視野を育てようとしている。」において、平均値 4.2 を超える。	企業訪問、SDGs 講演会、課題研究等を通して、グローバルな視野を持つ生徒の育成を図っているところである。	B	企業訪問、講演会等、グローカル視点の課題を発見させ探究活動を深めさせるなど、「総合的な探究の時間」の研究開発をより発展させた。海外交流も対面・オンラインと幅広い手法で実施した。学校自己評価アンケート１年次生：4.4、２年次生：4.2 と、1 年次生は高い数値をキープし２年次生は 0.2pt アップした。	A	これまでの研究成果を踏まえ、校内の関係部署と連携を図りながら､次年度以降の教育活動に反映させ、まずは今年度の取組を整理し、ブラッシュアップしていく。
重点的取組(3) 授業や生徒会活動、部活動など、何事にも自主的・自律的に行動できる生徒を育成する。	1 年次団	「予習・授業・復習」の学習習慣と３点固定の生活習慣を確立させるとともに、学校行事や委員会活動、部活動に協働的に、自律的に取り組ませる。	勉強と部活動、学校行事とのバランスを自分で上手にとり、すべきこととできることを前向きに考え、協力して取り組むことができる。	年度当初は学習習慣の確立に苦しんでいたが、次第にバランスがとれてきつつある。翠緑祭などを経験して、協働的、自律的に物事に取り組む意義や楽しさを学ぶことができている	B	学校自己評価の、学校行事が充実している、生徒会・委員会活動が活発に行われている、という項目の数値は高く、自律的、協働的に取り組めたと評価できる。学習面においても意識が向上してきている	B	「予習・授業・復讐」の学習習慣と３点固定の生活習慣が十分に確立できていない生徒に対する意識附け、動機付けが課題である。
	2 年次団	学校の中心年次として、学校行事などで生徒同士が協働して取り組み、自主的・自律的に行動できるよう支援する。	行事ごとで目標を決め、Classi を活用して取り組みの振り返りをすることで、自主的・自律的な行動ができるようになる。振り返り項目での目標達成率が 70%を超える。	翠緑祭やオープンスクールなどの行事では、中心年次としての自覚を持ち、生徒同士で協働し、取り組むことができている。	B	翠緑祭などの学校行事では、中心年次として生徒同士で協働して取り組み、成功へと導いた。 学類研修では各自で目標を決め、自主的に取り組み、Classi での振り返りでは肯定的な回答が 90%を超えた。	B	学校行事等で中心となる生徒は目標を持って自主的・自律的に取り組むことができるが、他の生徒にいかに目標を持たせるかの工夫が必要である。
	3 年次団	最終年次として、受験勉強だけでなく学校生活全てにおいて全力で取り組ませる。面談や集会だけでなく普段の生活を通して、学習への切り替えや将来への不安についてサポートする。	生徒各自が自分のすべきことを理解し、全力で取り組む。また、周囲の生徒も同様に全力で取り組んでいることを理解することで、互いを信頼し、また協力して切磋琢磨する集団になる。	昨年度より少しコロナも落ち着いたとはいえ、まだまだ部活動も翠緑祭も思っていた形で関わることができなかった。その中で、互いに意見を交わしながら、今自分達ができる形を模索して取り組んだ。	B	多くの生徒が、翠緑祭後、受験に向かってうまく切り替えることができた。共通テストではそれなりの得点であったが、油断せず落ち着いて出願校を決め、特別授業に向かっている。	B	コロナが浮き沈みする中での生活で、ある程度落ち着いたと思うが、内面ではこちらが思う以上に葛藤や不安、不満があると思われるため、寄り添う姿勢が必要であると考える。
	総務課	オープンスクールや学校説明会、本校 HP において、生徒が主体となって活動する様子を積極的に発信する。	在校生の活躍を中学生・保護者が好意的に受け止め､「求める生徒像」を理解した上で本校を志願している。	夏・秋のオープンスクールでは生徒主体で企画運営をすることができ、生徒の主体的活動として中学生に好評であった。 ブログの更新が順調に進められている。	B	オープンスクールでは生徒が主体となって活躍する様子を、学校説明会では本校の特徴的な取組を、HP では行事を中心に日常のトピックスを効果的に伝えることができた。	B	感染対策を考慮し、オープンスクールは中学 3 年生を対象として上限を設けて実施するのが望ましい。 学校紹介ビデオは更新から 3 年が経過したので、次年度で更新を行う。
	生徒課	講演会や勉強会を学期に 1 回開催し、求められるリーダー像やこれからの学びを考える機会を設定する。	授業内でのディスカッション、クラス討議、部活動ミーティングにおいて、率先して発言したり行動したりできる。	6 月に室長・委員長・有志対象のリーダー研修会と運動部員対象の講演会・勉強会が実施できた。学園祭の企画運営においても生徒が主体となるなど計画通りに学ぶ機会を設定できている。	B	多くの生徒は、物怖じせず発表したり、ディスカッションで発言したりすることができた。生徒会活動における意見交換も活発に行われた。	B	自分自身の考えをまとめ、相手に伝えられるように話す技術が向上した。他人の考えを聞き尊重する態度も身についた。校外に出て、発表・発言・発信する機会を増やしたい。
	進路指導課	キャリア･パスポートを活用した面談に加えて、講演会や講習会などを通して、生徒のキャリア意識の高揚を図る。	キャリア・パスポートを活用した対話的な面談に加え、講演会や講習会、土曜講座などを活用して知的好奇心を刺激し、自らの可能性を伸ばす志望形成やキャリア形成への支援がなされている。	キャリア・パスポートの活用が少しずつ根付いてきている。大学ミニ説明会、土曜活用、外部講師による難関大講習会や共通テスト Plus 講座などの実施を通して、生徒に知的刺激を与え、考えさせることができている。	B	面談でのキャリア・パスポートの活用が根付いてきた。大学ミニ説明会や難関大学講習会については、予想以上の生徒が参加し、積極的に質問するなど、主体的に自らの進路に取り組む姿勢が見られた。	B	今後さらに形式や項目を検討し、有効な活用に役立つようにしたい。 説明会や講習会で受けた刺激が、具体的な行動として日常の生活に生かせるよう支援するとともに、このような取り組みをさらに充実させ、キャリア意識の向上を図りたい。
	GLOBAL	「総合的な探究の時間・学校設定科目」における取組において、自主的・自律的に行動できる生徒の育成を図る。	自主的に社会貢献活動に取り組む生徒の人数がのべ 450 人を超える。	新型コロナウイルス感染症対策を講じながら､1 年次生全員が１度は活動に参加した。	B	社会貢献活動については、コロナ渦で実施できなかったものを、感染症対策を万全にして再開し、多くの生徒に活動の場を設定できた。 学校自己評価アンケートの平均値も 3.9 と、昨年度から 0.2pt アップしており、生徒に、地域社会に積極的に関わりたい意識が定着した。 企業との協働による社会貢献活動も拡充し、部活動単位や生徒個人で社会貢献活動に参加した人数が増加した。	B	単なる体験に終始しないよう、トレーニング・プランニング・振り返り等、教育効果を高める工夫をすることで、これらの取組をより充実したものに発展させていき、生徒の自己探求や自己実現につなげていく。

学校経営計画 重点的取組　および　取組の柱	分　掌　名	具体的な方策	目標とする状態・達成基準	達成状況（中間）	中間評価	達成状況（最終）	最終評価	結果分析及び改善策
重点的取組(3) 授業や生徒会活動、部活動など、何事にも自主的・自律的に行動できる生徒を育成する。	Ｊ　Ｌ　Ｐ	生徒課とともに、マナー講座や部活動に関する研修会等を企画・運営する	マナー講座や研修会が実施できる	生徒課が中心となり、マナー講座を実施することができた。2学期にも制服業者の支援を受けて、生徒会がリーダー研修会でマナー講座を実施する。	B	生徒課が中心となり、１学期にマナー講座を実施することができた。２学期には生徒会がリーダー研修会も制服業者の支援を受けて、マナー講座を実施することができた。	B	生徒課が生徒会と連携して、様々な取り組みを実施している。今後も様々な角度から助言できるようにしたい。
取組の柱(1) 効果的・効率的な広報活動を推進し、城東の教育を広く周知するとともに、学校評価システムの適正化を図る。	総　務　課	・学校自己評価アンケートや新入生アンケートをもとに、広報の内容や方法を検討し、より効果的・効率的な広報活動を推進する。 ・学校評価に係る各種アンケートを実施し、結果の共有を図り学校改善の一助とする。	・各種広報活動における発信内容の充実が図られ、効率的・効果的な広報活動が行われている。 ・例年並みの志願倍率を維持している。 ・学校評価に係る各種アンケート結果が共有されている。	広報活動を従来の形に戻し、中学生の志望校決定に影響力のある行事として実施することができた。	B	感染状況を考慮しながらの広報活動を順調に実施し、進学希望状況調査では一次調査では 1.66 倍、二次調査では 1.57 倍であった。学校自己評価アンケートは配信による回答が定着し、効率的に実施できた。	B	本校の特徴や雰囲気を伝える広報活動を継続する。感染状況によっては上限を設けた授業見学なども考える。中学校別や塾での説明会が再開されると思われるので、柔軟に対応していく。学校自己評価アンケートでは回答率の向上を図る。
取組の柱(2) カリキュラム･マネジメントを推進するとともに、ICT を活用した多面的な評価等、学習評価方法の研究を推進する。	教　務　課	カリキュラム･マネジメントの根幹をなす３観点に基づく適切な評価を実施する上で、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法を構築する。	各教科、科目において、適切な時期に「学びの自己評価シート」を使った自己評価を加味した学習評価ができている。	体育等を中心に、自己評価を加味した学習評価の具体について研究が進みつつある。引き続き、観点別学習状況の評価等の充実に向けて、ＯＪＴ等で全教科への波及を促していく。	B	ＯＪＴⅡでは、各教科で新課程を主眼に置いた学習評価の情報交換を行うことで共通理解を図った。観点と評定の換算表の作成など、観点別学習状況の評価についての条件整備も進めた。	B	指導と評価の一体化も含めて、観点別学習状況の評価を円滑に進めていくためには、特に「主体的学習に取り組む態度」をはじめとした、具体的な指導、学習活動、評価手段・場面、評価規準などについての事例の蓄積と共有が必要である。
取組の柱(3) 生徒が自ら企画・運営できる活動を充実させるとともに、生徒会活動や社会貢献活動の活性化を図る。	生　徒　課	毎月３回以上は生徒会で企画会議を開催し、必要に応じて、①アンケート調査②広報活動③有志募集④記録・振り返りを行う。	翠緑祭などの生徒会行事に関して、企画内容を工夫して内容の充実を図る。社会貢献活動では、部活動単位での参加数 10 以上（昨年は８）が参加できる。	生徒会活動や学園祭に関する企画会議を毎月３回は実施できている。学園祭に関しては「記録・振り返り」を実施中である。ボランティア活動は今後も参加の呼び掛けを行う。	B	学園祭は、生徒の企画力により昨年よりも実施できたイベントが増え、生徒の達成感が向上した。社会貢献活動では、延べ 11 の部活動が参加できた。	B	教育活動の制限が多少緩和されたことで、生徒が主体となり取組めた行事が多かった。社会貢献活動は各事業所との連携が図れたので、今後も継続して実施したい。部活動単位での活動と学類の特性を活かした活動をより充実させたい。
取組の柱(4) 新教育課程で求められる学力を育むための指導の実施と検証を通して、指導体制の構築を図る。	進路指導課	JLP や他の分掌と連携して、新教育課程や大学入試改革で求められる力の育成に資する研究会への参加、研修会の実施を継続するとともに、これまでの実践を踏まえて、多様な進路の実現を支援する指導体制の構築を目指す。	主体的に学ぶ力を育成するための基盤として、批判的思考力、論理的思考力、課題解決力を身につけ、自らの進路実現に見合う二次力を育成するための指導方法や実力テストの作問の方針が教科間で共有、実践されている。	夏の教員研修セミナーの内容の教科内での共有や、校内での小論文講習会の実施により、お互いに研鑽を深めている。	B	校外の研究会や研修会には、進路指導課や教科担当で参加し、情報を共有した。校内研修についても、校外の研修会に参加した若手教員が講師をつとめるなど、お互いに研鑽を深めることができた。実力テストについては、1 年次生の今後についての協議をしている。	B	多様な進路実現のための指導法の研修の場として、生徒対象の学習支援の講習会などのあり方など工夫していきたい。 令和７年度方実施される大学入試についての情報の収集を継続し、よりよい指導体制の構築に努めたい。
取組の柱(5) 実践的な防災体制の強化及び校内の美化を組織的に推進する。	厚　生　課	地震等の災害に対応できる実践的な防災避難訓練や防災について学ぶＳＨＲを実施する。また、校内美化体制の整備、充実を図るため、美化委員会の活動を活発化させ、生徒が主体的に校内美化に取組めるよう具体的な目標の設定や活動を支援する。	災害発生直後の教員・生徒の行動が明確で、スムーズな避難が可能な防災訓練や防災について学ぶＳＨＲを実施している。また、美化委員会を中心に重点目標が定められ、課題解決に向けて自主的な取組を実施している。	教員・生徒の行動が明確で、スムーズな避難が可能な防災訓練や防災について学ぶＳＨＲを実施できた。また、各クラスで美化委員を中心に清掃重点目標が定められ、達成に向けて自主的な取組ができている。	B	防災非難訓練時のスムーズな避難ができるための事前学習や災害時の判断・行動について考えるＳＨＲを実施できた。また、各クラスで美化委員を中心に清掃重点目標を定め、達成に向けて自主的に取り組むことができた。	B	昼食休憩終了直後の移動時間に実施した第２回防災避難訓練は、対応にとまどう生徒も見られた。事前学習を充実させたい。本年度からはじめた清掃重点目標を定める美化委員会の取組を次年度も内容を改善した上で継続を考えたい。
取組の柱(6) 探究的な学習を支える図書館としての機能を充実させるとともに、生徒の読書活動を推進する。	図書文化課	・リーフレットの配信（配付）やオリエンテーション等を通じて、生徒や先生に図書館が備えている機能を知ってもらう。 ・委員会活動によって、人と本をつなげる。	・探究的な学習において、生徒が図書館の機能をうまく活用している。 ・年間の貸出冊数が 10000 冊を超えている。	・9 月末までの貸出冊数が昨年度より 250 冊ほど減少している。 ・探究活動での調査の手段が iPad に偏る傾向にある。	C	・1 月末で貸出冊数が約 6000 冊で昨年のこの時期よりより少し減少している。 ・図書委員の活動が活発で、司書によるインスタグラムでの発信や教員と生徒の読書交流「読みとも」等もはじめた。	B	貸出冊数については、部活動や行事等がほぼ通常に戻り、読書の時間が取れなくなったこと、一人一台端末になって探究活動でネット検索が中心になり書籍の利用が減ったこと等が考えられる。今後は情報センターとしての整備を進めると同時に、書籍を使って調べる重要性を知る機会を作る必要がある。
取組の柱(7) オンラインを活用するなど海外体験の在り方を工夫し、異文化交流の深化を図る。	国　際　課	海外文化体験研修(FLAT in Osaka) や大学院留学生との交流会のサポートを行う	海外文化体験研修(FLAT in Osaka)や大学院留学生との交流会が実施できる	FLAT in Osaka50 名が参加し、大好評であった。また、1 年次生の国際教養学類へ進学したい 50 名程が、大学院留学生との交流会に参加した。	A	２年次国際教養学類生徒を対象に３回の国際理講座を実施した。３月には海外修学研修(オーストラリア)を実施予定で２年次全学類から生徒が１７名参加する。更には、２年次国際教養学類生徒がハーバード大学生とオンライン交流と研修会を実施予定である。	A	様々な国際交流活動(行事)を再開することができた。今後も以前行われていた海外や国際交流活動を再開させ継続できるよう取り組みたい。 現在、令和５年度夏実施予定の海外文化体験研修を検討中である。
取組の柱(8) 教育相談や外部機関との連携を通じて、生徒の悩みに組織的に対応するとともに、ピアサポート活動の充実を図る。	相　談　課	現在の教育相談体制の維持・充実を図るとともに、様々な機会を捉えて教育相談的な発想を浸透させる。	①校外のカウンセラー、相談機関との連携を維持・発展させる。②新入生へのオリエンテーション、教育相談講演会などの機会にピア・サポートの発想を伝える。	カウンセラー、校医、ＳＳＷとの連携はよく取れている。担任・保健室との意思疎通も図れており、早めの対応が行えている。	B	生徒の学校自己評価が 0.2、教員は 0.1 ポイント上昇した。これは、担任の先生がたによる面談や SC、Dr.、SSW による日常的なサポート活動の反映と考えられる。教員の自己評価の 0.1 ポイント低下はコロナによる意思疎通の低下が影響したのかもしれない。	B	教育相談に関しての校内ならびに校外の諸機関との連携はよく図られているので、この体制を維持・充実させていきたい。積極的な予防面も視野に入れたピア・サポートをさらに推進し、学校全体の支え合う気持ちの醸成を目指す。
	１　年　次　団	相談課、保健室、医療機関等との連携を密にして、生徒・保護者の理解に努め、悩みを抱えた生徒を支援する。お互いを認め合い、自己も他者も大切にできる集団作りをする。	悩みを抱えた生徒に対する必要な支援を早期に行うことができる。生徒自身が協働的な取り組みを通して自己肯定感を高め、安心して学校生活を送ることができる。	悩みを抱えた生徒、保護者に対して、相談課、保健室、医療機関等との連携を図りながら支援をすることができている。	B	悩みを抱えた生徒や保護者に対して、まだまだ支援できることがあると考える。相談課、保健室、医療機関等との一層の連携を図っていく必要がある。	B	生徒の支援を行う教員への支援も充実させていく必要がある。相談課、保健室、医療機関等との連携を図ると共に教員間の連携も密にしていきたい。
取組の柱(9) 教職員の働き方改革を推進し、業務の効率化を図る。	管　理　職	校内好事例の見える化及び好事例の実践、成果聴取を行う。また、教職員との個別面談や産業医による個別の助言を行う。	全教職員の時間外在校等時間の平均（１ヵ月当たり）及び２ヵ月平均 80 時間を超える教職員の人数が、それぞれ前年比５％減っている。	80 時間を超える教職員の人数は前年度比(８月末現在)3.2%減少した。 働き方改革における校内好事例を作成し、全職員へ紹介するとともに新たな取組を実施している。	B	全教職員の時間外在校等時間の平均（１ヵ月当たり）は前年度比（12 月末現在）8.0%の増。 ２ヵ月平均 80 時間を超える教職員の人数は前年比 5.5%減。月 100 時間以上の教職員数が増えた結果、２ヶ月平均 80 時間の教員数は減っているが時間外在校時間は増えた。新学習指導要領に対応するための教材研究も要因の一つと考えられる。	B	働き方改革に繋がる取組の事例一覧を作成し、全職員へ紹介するとともに新たな取組を促した。折に触れ『働き方改革』を意識するように呼びかけをした。最終面談時に取組について聞いたところ、多くの教員が意識していたことがわかった。意識して取り組むことが健康維持に繋がり、さらに次年度の働き方改革に数字として表れることを期待する。